

ミドリ「桜はすばらしかったけど、^ち散ってしまったわね。」

ふみお「でも、山の方などにはちらほら見える。種類が違うんだろうな。上山にしか咲かないと言われる三吉山のシンエイザクラ(信英桜)は、いつごろ咲くのかな？」

文じい「5月の連休のころのようじゃ。」

ふみお「三吉山のどのへんなの？」

文じい「^{ちようじよう}頂上近くで、岩がゴロゴロしている“^{がんかい}岩海”といわれているところじゃ。」

あゆむ「でも、今日は^{まぎの}牧野なんだよね。」

ミドリ「また板碑ね、楽しみだわ。」



牧野の

如来寺六面幢

あゆむ「お、すごい！^{とう}塔のようなものが建っている。六角形でスマートでかっこいいな！」

ミドリ「それで六面幢というのね。」

あゆむ「なにか彫ってある。えらい人かな？」

ふみお「^{ぼうし}帽子のようなものをかぶって、手を合わせたり、何か手に持っていたりという感じだな。」

文じい「ふむ。これは十王といって、“^{めいど}冥途”、つまりあの世じゃな、そこに10人の王がいるがその方たちじゃ。かぶっているものは^{かんむり}冠。」

あゆむ「ふうん。そのうちの6人か。」

ミドリ「でも、一人だけなんだが違うわね。帽子はかぶっていないし、それに、^{ふく}なんだか服を着ていないような、少し変だわ。」

文じい「この方は、“^{だつえいば}奪衣婆”という方じゃ。」

ミドリ「ダツエバ。どういう人？」

文じい「人は亡くなると“冥途”に行くときれる。その時、“^{さんず}三途の川”と呼ばれる川を渡って行く。ところが、その川のほとり、つまり、冥途の入り口に奪衣婆さまがおる。そこで、渡ってきた人の服をはぎ取るのじゃ。」

あゆむ「え、そりゃひどい。でも、自分もきちんとは着ていないみたいだね。」

ミドリ「何のためにそんなことするの？」

文じい「ふむ。奪衣婆さまは、はぎ取った服を木の枝にかけて、その重さで生きている時の^{つみ}罪の重さを見るというのじゃ。」

ふみお「あれ、あの世での罪の重さを調べ



(十王)

る裁判官というのはエンマ大王じゃなかった？」

ミドリ「聞いたことあるわ。調べられてうそをつく
と舌をぬかれるとか…」

あゆむ「え、こわいね！」

文じい「フッフ。実は、冥途には10人の裁判官がいて、10人から次々にくわしく調べられる。」

あゆむ「あ、それが十王か？」

文じい「そういうことじゃ。“閻魔王”はその中心となる王なのじゃ。」

ふみお「そういえば、お寺で、掛け軸になっている十王の絵を見たことがある。たしか、お盆の時だったな。」

ミドリ「あ、思い出したわ。“地獄絵”とか言ったわね。あの世で、亡くなった人々がさまよい苦しんでいる姿は、とても見られなかったわ。」

ふみお「初めのところに婆さんの絵があったな。あれが奪衣婆だったかな。」

文じい「そうじゃの。坊平の御清水にある姥神は上山城にもそのレプリカがあるが、そのほか、山姥などとも言われてあちこちに見られるものは奪衣婆なのだろう。」

ミドリ「罪の重さでどうちがってくるのかしら。」

文じい「行くところが違う。もっとも厳しくてつらい“地獄”から、一番上の幸せが得られる“天”まで、6種類の世界がある。“六道”と言われている。」

あゆむ「でも、なんで亡くなってからもそんなに苦



(奪衣婆)

しまなければならぬのかな。」

文じい「仏教では、命あるもの、迷いの六道世界を生まれ変わりながら生きていくという考え方がある。それを、“輪廻”と言っておる。」

ふみお「正しく善いことをしながら生きていくことが大事だという教えになるね。」

ミドリ「なるほどね。それで、王たちを彫るのは？」

文じい「十王を祀れば、死んだ後に罪を軽くしてもらえると考えからだろう。」

あゆむ「ふうん。ところでその上にも何か彫ってあるけど、十王の残りかな？」

ミドリ「あら、それでは数がおかしくなるわ。下の5王と、上の6つでは11になってしまう。」

ふみお「上に、彫ってあるのは、丸い頭で何か仏さまという感じだね。」

文じい「そう、上の龕部というところのものは地藏様じゃ。六地藏は、六道のそれぞれの姿を現し、迷えるものを救うと言われておる。」

ミドリ「願いがいっぱいこめられているのね。」

ふみお「信じて願う人々がおそらく多くいた如来寺というここは、いったいどういうところだったのだろうか、興味
がわいてきたな。」



文じい「うむ。この牧野というところは、まだまだほかにもたくさんあるところなのじゃ。それを見ながら、またこの次考えてみよう。」

